

令和六年四月号

《第一三六号》

しらへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

卯月の祭典・行事案内

【月次祭】

十一(木)

二十三日(火)

九時半

【昭和祭】

二十九日(月) 九時半

【昭和天皇御製】(第二二四代)

「田家雪」

みゆきふる畑のむぎふにおりたち
ていそしむ民をおもひこそやれ

(昭和十二年)

《昭和祭の御案内》

・四月二十九日(月) 九時半より

「激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」祝日です。日本人みんなで昭和天皇をお偲びすると共に、民族の悲境を見事に乗り越えた昭和への思ひを次代に正しく伝えていきたいと思います。

【天長祭】 二月二十三日

天皇陛下には満六十四歳のお誕生日をお迎えになりました。当社では十二名の参列の



なか宮司が斎主を、禰宜が典儀と伶人を務め、巫女が「浦安の舞」を舞ひ納め、そして、参列者共に今上陛下の御製五首を朗詠し奉納致しました。

は午前九時に、黄櫨染御袍をお召しになつて出御され、御拝礼遊ばされました。

また、皇居東庭では、御即位後初めて事前申込みのない従前の形で、一般参賀が実施され、参集した延べ一万四千人の人々に親しくお応えにされました。

【御製五首】

・学舎にひびかふ子らの弾む声さや
けくあれとひたすら望む

・人々の願ひと努力が実を結び平ら
けき世の到るを祈る

・世界との往き来難かる世はつづき
窓開く日を偏に願ふ

・コロナ禍に友と楽器を奏でうる喜
び語る生徒らの笑み

・をちこちの旅路に会へる人びとの
笑顔を見れば心のみぬ

【推薦図書】

『古事記』

河出文庫

池澤 夏樹 訳 九九〇 円

三浦佑之の〈解題〉から

池澤夏樹氏の手になる『古事記』は、端正で媚びるところがない現代語でつづられている。そして、それが池澤氏の現代語訳『古事記』の理想のすがたであることは、冒頭に置かれた「この翻訳の方針―あるいは太安万侶さんへの手紙」のなかで表記されている。

ぜんたいの基本方針としてあまり自分の言葉を補わず、あなたの文体ないし口調をなるべく残すことを心掛けました。



気ままに 『古事記』(五十六)

「かむやまといはれびこのみこと
神倭伊波礼毘古命の誕生」

このやうなことがあり、海わたつみのかみ 神の女
とよたけめ 豊玉毘売命が、自ら参り出て言ふには、「私

はすでに身ごもつてをり、今産むときに来てゐます。それで思ひますには、天つ神の御子は、海原に産むべきではありません。よつてかうして出て参りました。」と申しあげました。そこで早速に海辺の渚に、鵜の羽を葺き草にして産屋を造りました。ところが、その産屋の屋根が葺き終はらぬうちに、豊玉毘売命はお腹の陣痛がはげしくなり、堪え難くなつたので、産屋に入られました。そして、いよいよお産が始まらうとするときに、その夫の火遠理命に申されるには、「全て異郷の者は、お産の時には、自分の国の姿になつて産むことになります。それで、私も今、本来の身体になりお産をします。お願いですから、私の姿を御覧にならないでくださいませ。」と申しあげました。

すると、夫の火遠理命は、その言葉を不思議に思はれて、お産が始まるころを、密かにのぞいて御覧になると、八尋もある大鰐になつて、這ひ回り身をくねらせてゐました。この様を一目見るや、火遠理命は驚き、恐ろしさに逃げ去つていかれました。すると、豊玉毘売命は、夫のぞき見をされたことを知り、恥づかしいことと思はれ、その御子を生んだまま残し、申されるには、「私はいつでも海中の道を通つて、ここへ往き来しようと思つてゐましたが、私の姿をのぞいて御覧になつたのは、とても恥づかしいことなので」と申して、すぐに海の果ての境を塞いで、海神の国に帰つていかれました。このやうなわけで、そのときお産みになつた御子を名付けて、こなきさたけうかやふきあへずのみこと天津日高日子波限建鵜草葺不合命と謂ふのです。しかしながらその後は、火遠理命がのぞき見をされた心を恨めしくお思ひになりながらも、夫を慕ふ心に堪えられなくて、その

御子を養育申しあげるといふ理由で、妹の玉依毘売を遣はして、そのひめに託して歌を奉りました。その歌は、

赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君が装し 貴くありけり

と歌ひました。そこで、夫の神が答へて、
沖つ鳥 鴨著く島に 我が率寝し 妹は 忘れじ 世のことごとくに

と歌はれました。そして、日子穗穗手見命（火遠理命）は高千穂宮に五百八十年間をられました。御陵は、その高千穂の山の西にありま す。この天津日高日子波限建鵜草葺不合命が、その叔母の玉依毘売命を妻として産んだ御子の名は、五瀬命、次に稲氷命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命、亦の名は豊御毛沼命、亦の名は神倭伊波礼毘古命と謂ひます。そして、御毛沼命は、波の上を跳んで常世国に渡り、稲氷命は亡き母の本国のある海原にお入りになりました。

（上巻 最終）



四月十一日（木） 十時より

【岩国護国神社春季例祭】

岩国市民の守護神でもある三千三十三柱の英霊の御霊に、今の平和への感謝と国家護持の祈念の誠を捧げましょう。

（玉串料等当社でも受け付けます）

【お知らせ】

この四月から当神社に兼務する神職を紹介します。（週に二日程度）

黒杭 護宮司（昭和三十七年生）

客神社宮司、五所神社と宇津神社の宮司を兼務。

宜しくお願いいたします。

『昭和天皇と岩国』（一）

昭和二十二年十二月五日

山陽本線柳井駅からのお召列車は、十二時三十六分藤生



駅に御到着。山口県御巡幸最後の御訪問地岩国にお成りになりました。お召自動車にて向かはれたのは、国立岩国病院でした。当時の稲田院長からは病院の現況を御聴取され、内科病棟に進まれ、復員者の患者名を御覧になられる。当時ラバウルからの帰還者であつた藤本律夫氏は「だうだね、身体の具合は・・・あちらでは大変だつたらう、早くよくなつて下さいね」のお言葉を賜る。

外科病棟へも向かはれ、全患者に御ていねいな慰問のお言葉をかけられる。そして、岩国興業組合に進まれ、厚生に勤しむ人々の製材作業を御覧になられた。次いで川下岩国厚生会館にお着きになり、引揚者、戦災者、遺族らの竹製品の作業を御覧になられました。そして、お召自動車は寿橋を渡り市役所前の通りから戦災校の東小学校を御訪問されました。

（続く）